

【本文】

人の心は水の器にしたがふが如く、物の性は月の波に動くに似たり。故に汝当座は信ずといふとも後日は必ず翻へさん。魔来たり鬼来たるとも騒乱する事なかれ。夫天魔は仏法をにくむ、外道は内道をきらふ。されば猪の金山を摺り、衆流の海に入り、薪の火を盛んになし、風の求羅をますが如くせば、豈好き事にあらずや。

【通釈】

人の心は水が器の形にしたがつて変わるようなものであり、物の性質は水面の月影が波に揺れるのに似ている。故にあなたは（仏法を）今は信じてと言っているが、後日には必ず心を翻すであろう。魔が来ても鬼が来ても騒ぎ乱してはならない。そもそも天魔は仏法を憎み、外道は仏法を嫌う。それ故、猪が金山を摺り、諸河が大海に流れ込み、薪が火を盛んにし、風が求羅を成長させるように、（諸難を資糧とし信心を堅固にしていくならば）それらはむしろ結構なことではないか。

【主な語句の解説】

猪の金山を摺り〜風の求羅をます：『摩訶止観』（止観会本中一八七）に見える。三障四魔に随わず、畏れず、修行を盛んにすることの譬え。
猪の金山を摺り：猪が金山の輝く光を憎み、その光を消そうとして身を擦ること、かえって金山が輝きを増すこと。
衆流の海に入り：あらゆる河の水を海が受け入れること。
薪の火を盛んになし：種種様様の薪が火の勢いを盛んにすること。
風の求羅をます：求羅は伽羅求羅という虫の略。風が伽羅求羅の微細な身を成長させること。

【背景と大意】

本抄は、文永五（一二六八）年、日蓮大聖人御年四十七歳の時の御述作で、対告衆等は不明です。上下二巻からなり、題号は、法華の正法を弘通する「聖人」と、仏法の道理に昏ぐらい「愚人」との問答を意味しています。

内容は、まず世の無常に悩む愚人のところに、律宗、浄土宗、真言密教、禅宗の行者等が次々に現れ、それぞれが前者を否定し自宗への帰依を勧めます。諸宗の真偽に迷う愚人は、やがて正法受持の聖人に巡り合い、問答によって諸宗の誤りを知り法華経の正義を聞きます。そしてついに愚人は、法華経の肝要・妙法五字の功德を聞き、妙法を信受するに至ります。

本日拝読の箇所は、本抄の末尾に当たり、人の心の弱さや移ろいややすさを誠められ、不退転の信心に住するよう励まされている所です。

○情慮を廻らし、今、折伏を實行しよう

拜読の御文に「人の心は水の器にしたがふが如く（中略）汝当座は信ずといふとも後日は必ず翻へさん」と仰せられ、人の心は非常に移ろいやすいものであると諭されています。たしかに私達は、一度決意しても時の経過や悪縁に触れることによって、その決意が揺らぎ翻ってしまうことがあります。特に折伏の実践は、魔が競い起こることによって躊躇してしまうことがあるかもしれません。そんな私達に対し、大聖人は「速やかに情慮を廻らし忽いで対治を加へよ」（立正安国論・御書二四八）と仰せられています。つまり、心を正道に向かわせ、急いで謗法を退治すべく折伏を實踐しなければならぬと教示されているのです。

私達は、間違つた教えを信仰すれば不幸になることを知っています。人々を救えるのは大聖人の仏法のみであることも知っています。しかも、謗法をそのままにしておけば、与同罪を蒙ることとなり、無慈悲との誹りを受けることにもなります。

邪宗邪義の誤りを指摘し、正しい教えを顯示していく破邪顕正の折伏は、私達にしかできないことです。一切の焦点を折伏の實踐に当て行動する、今がその時です。

○障魔を乗り越え、いよいよ信心決定を

拜読の御文に「天魔は仏法をにくむ、外道は内道をきらふ」とあります。天魔は、魔が支配する迷苦の境界から脱却しようとする仏法の信仰者を憎み、偏見に執着し仏法を嫌う外道と共に、正法の行者の修行を妨げようとするのです。

大聖人は『兄弟抄』に、拜読の御文に示される譬え直前の『摩訶止観』の釈（止観会本中一八五）を引用されて、「此の法門を申すには必ず魔出来すべし。魔競はずば正法と知るべからず。第五の巻に云はく『行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競ひ起こる（中略）』等云云。此の釈は日蓮が身に当たるのみならず、門家の明鏡なり」（御書九八六）と仰せられています。このように、障魔が競うのは受持正行の証なのです。

ですから、拜読の御文に「魔来たり鬼来たるとも騒乱する事なかれ」と示されるように、私達は諸難が競うことで迷いの心を起こしたり、動揺してはなりません。障魔の用（はたらき）は、猪や衆流、薪や求羅の譬えのように、私達の修行を増進させるものと受け止めるべきです。本抄別段に「只折伏を行じて力あらば威勢を以て謗法をくだき、又法門を以ても邪義を責めよとなり」（同四〇二）と仰せのごとく、魔の所為を恐れず、唱題で培った勇氣を持って折伏に挑戦してまいりましょう。

○日如上人御指南

御本尊様の広大無辺なる功德を絶対の確信を持って信じきっていくことであり、この御本尊様への絶対の確信と弛まぬ折伏の實踐こそが、今日の混沌とした世の中を変えていくことができる最善の方途であります。

（大日蓮・令和五年五月号）

『立正安国論』奏呈の七月、本年の後半戦に入り、総本山をはじめ全国各末寺において一カ月間の唱題行が行われています。唱題は一切を開く鍵です。お寺の唱題会に参加して、皆で心を合わせて唱題し、その功德と歡喜をもって折伏・育成に打って出ることが肝要です。御聖誕八百年を慶祝する記念総登山についても、今一度講中への声かけを徹底し、一人でも多くの講員が参加して福德を積んでいけるよう推進していきましょう。暑い最中ではありますが、お互い信心による汗を大いに流して、最善の慈悲行に徹してまいろうではありませんか。